



岩波文庫

5545

河明り・老妓抄

他一篇

岡本かの子作

岩波書店

昭和三十一年一月九日 第一刷發行

河明り・老妓抄

定價四拾圓

作者 岡^{おか}本^{もと}かの子

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 東京都板橋區板橋町十丁目二四八四番地
白井知一

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

株式會社三陽社印刷・田中製本

岩波文庫

5545

河明り・老妓抄

他一篇

岡本かの子作



岩波書店

目 次

河 明 り	五
老 妓 抄	八七
東海道五十三次	一一五
解 說 (吉田精一)	一四一

河

明

り

私が、いま書き續けてゐる物語の中の主要人物の娘の性格に、何か物足りないものがあるので、これはいつそのこと環境を移して、雰圍氣でも變へたらと思ひつくと、大川の満ち干の潮がひた／＼と窓近く感じられる河沿ひの家を、私の心は頻りに望んで來るのであつた。自分から快適の豫想をして行くやうな場所なら、却つてそこで情^{なま}けて仕舞ひさうな危険は充分ある。しかし、私はこの望みに従ふより仕方がなかつた。

人間に交つてゐると、うつら／＼まだ立ち初めもせぬ野山の霞を想ひ、山河に引き添つてゐるとき、激しくありとしない人が想はれる。

この妙な私の性分^{しやうぶん}に従へば、心の一隅の危険な望みを許すことによつて、自然の觀照の中から、ひよつとしたら物語の中の物足らぬ娘の性格を見出す新たな情熱が生れて來るかも知れない——その河沿ひの家で——私は今、山河に添ふと云つたが、私は殊にもこの頃は水を憶^{おも}つてゐるのであつた。私は差しあたりどうしても水のほとりに行き度いのであつた。

東京の東寄りを流れる水流の兩國橋邊りから上を隅田川と云ひ、それから下を大川と云つてゐる。この水流に架かる十筋の橋々を縫ふやうに渡り檢^{あらた}めて、私は流れの上下の河岸を萬遍なく探してみた。料亭など借りるのは出來過ぎてゐるし、寮は人を介して頼み込むのが大仰だし、その他に頃合ひの家を探すのであるが、とかく女の身は不自由である。私は、今度は大川から引き水の掘割りを探してみた。

白木屋横手から、まづ永代橋詰まで行くつもりで、その道筋の二つ目の橋を渡る手前にさしかゝると、左の河並に横町がある。私有道路らしく道幅を狭めて貨物を横たへてゐるが、陸側は住居附きの藏構への問屋店が並び、河岸側は荷揚げ小屋の間にしんかんとした洋館が、まだらに挟つてゐる。初冬に入つて間もないあたゝかい日で、照るともなく照る底明るい光線のためかも知れない、この一劃だけ都會の麻痺が除かれてゐて、しかもその冴え方は生々しくはなかつた。私はその横道へ入つて行つた。

河岸側の洋館はたいがい事務所の看板が懸けてあつた。その中の一つの瑛瑛質の壁に蔦の蔓が張り附いてゐる三階建の、多少住み古した跡はあるが、間に合せ建てではないそのポーチに小さく貸間ありと紙札が貼つてあつた。ポーチから奥へ抜けてゐる少し勾配のある道路の突き當りに水も覗いてゐた。私はよく見つけ當てたといふよりは、何だか當然のやうな氣がした。望みといふものは、意固地になつて詰め寄りさへしなければ、現實はいつか應じて來るものだ。私が水邊に家を探し始めてから二ヶ月半かゝつてゐる。

二、三度「ご免下さい」と云つたが、返事がない。取り附きの角の室を硝子窓から覗くと、薄暗い中に卓子のまはりへ椅子が逆にして引掛けてあり、塵もかなり溜つてゐる様子である。私は道を距てて陸側の藏造りの店の前に働いてゐる店員に、理由を話して訊ねて見た。するとその店員は、家の中へ向つて伸び上り、「お嬢さん」と大きな聲で呼んだ。

九曜星の紋のある中仕切りの暖簾を分けて、袂を口角に當てて出て來た娘を私はあまりの美しさにまじ／＼と見詰めてしまつた。頬の豊かな面長の顔で、それに相應しい目鼻立ちが捌けてつ

いてゐるが、いづれもしたゝかに露を帯びてゐた。身丈も恰幅かつぶくのよい長身だが滞りなく撓しなつた。一たい女が美しい女を眼の前に置き、すぐにさうじろく見詰められるものではない。けれども、この娘には女と女と出會つて、すぐ探り合ふあの鉤針かぎはりのやうな何ものもない。そして、私を氣易くしたのは、この娘が自分で自分の美しさを意識して所作する二重なものを持たないらしい氣配である。そのことは一目で女には判る。

娘は何か物を喰べかけてゐたらしく、片袖の裏で口の中のものを始末して、自分の忍び笑ひで、自然に私からも笑顔誘ひ出しながら、

「失禮いたしました。あの何かご用——」

そして私がちよつと河岸の洋館の方へ首を振り向けてから用向きを話さうとする、その間に私の洋傘を持ち仕事鞆かばんを提げてゐる、いくらか旅仕度にも取れる様子を見て取つたらしい娘は、「あ、判りました。部屋をお見せいたすのでせう」といつたが「けれども……あんな部屋」とまた云つて私と向う側の貸間札のかゝつてゐる部屋の硝子戸を見較べた。私はやゝ失望したが、この娘に對して少しも僻ひがんだり氣おくれはしない、「……あのとにかく見せて頂けないでせうか」すると娘はまたはつきりした笑顔になり、「では、とにかく」と云つて、そこにある麻裏草履ざうりを突っかけて、先に立つた。

三階は後で判つたことだが、この雜貨貿易商である娘の店の若い店員たちの寢泊りにあててあり、二階の二室と地階の奥の一つ、これも貸部屋ではなかつた。たつた一つ空いてゐるといひ、私に貸すことの出来るといふ部屋は、さつき私が覗いた道路向きの事務室であつた。

私が本意なく思つて、「書きものための計畫」のことを少し話してみると、娘はちよつと考へてゐたが、

「よろしうございます。ぢや、こちらの部屋をお貸しいたしませう」と更めて決心でもした様子で、それと背中合せのさつき塞つてゐるといつた奥の河沿ひの部屋へ連れて行つた。

その部屋は日本座敷に作つてあつて、長押なぐし附きのかなり凝つた造作だつた。「もとは父の住む部屋に作つたのでございます」と娘は云つた。貸部屋をする位なら、あんな事務室だけを擇つて貸さずにこの位の部屋の空いてゐるのを何故貸さないのかと、私はあとでその事情は判つたけれど、その時は何も知らないので不審に思つた。

ともかく私は娘の厚意を喜んで、そして、

「では明日からでも、拜借いたします」

さう云つて、娘に送られて表へ出た。私はその娘の身なりは別に普通の年頃の娘と違つてゐないが、ぢかに身につけてゐるものに、茶絹こしちで拵こしらへて、手首まで覆つてゐる肌襦はだじやう衣のやうなものだの、脛すねにびつちりついてゐる裾裏と共色の股引を穿いてゐるのを異様に思つた。私がそれ等に氣がついたと見て取ると、娘は、

「變つて居りまして。なにしろ男の中に立ち混つて働くのですから、ちと武装してをりませんとね」

と云つて、軽く會釋して、さつさと店の方へ戻つて行つた。

あくる日に行つてみると、私に決めた部屋はすっかり片附いてゐて、丸窓の下に堆朱つゐしゆの机と、

その横に花梨^{くわりんどう}胴の小長火鉢まで据ゑられてゐた。

そこへ娘は前の日と同じ服装で、果物鉢と水差しを持つて入つて來た。

「どういふご趣味でいらつしやるか判りませんので、普通のことにして置きましたが、もし、お好きなら古い書畫のやうなものも少しはございますし……」

そこで果物鉢を差出して、

「かういふふうなものなら家の商品でまだ澤山ございますから、ご遠慮なくおつしやつて下さいまし」

果物鉢は南洋風の焼物だし、中には皮が濡色をしてゐる南洋産の龍眼肉^{りゆうがんにく}が入つてゐた。私はその鉢や龍眼肉を見てふと氣附いて、

「お店は南洋の方の貿易關係でもなすつていらつしやるのですか」と訊いた。

「はあ、店そのものの商賣は、直接ではございませんが、道樂と申しませうか、船を一ぱい持つて居りまして、それが近年、あちらの方へ往き來いたしますので……」

娘の父の老主人はリョウマチで身體の不自由なことでもあり、氣も弱くなつて、なるだけ事業を縮小したがつてゐる。しかし、店のものの一人に、強情に貿易のことを主張する男がある。その男は始終船に乗つて海上に勤め、そして娘は店で老主人の代りに、手別けして働いてゐる。娘は簡潔に家の事情をこゝまで話した。そして、その船貿易を主張する店のものに就いて、なほかう云つて私の意見を訊いた。

「その男の水の上の好きなことと申しましたら、まるで海龜^{かいぼう}か鰐^わのやうな男でございます。陸

へ上つて一日もするともう頭が痛くなると申すのでございます。あなたさまは物をお書きになつて、いろ／＼お調べでございませうが、そんな性質の人間もあるのでございませうか」

と云つたが、すぐ氣を變へて、「まあ、お仕事始めのお邪魔をいたしましたして、またいづれお暇のとき、ゆつくりとお話を承りたうございますわ」と、火鉢の火の灰を拂つて炭をつぎ、鐵瓶へ水を注ぎ足してから、爽やかな足取りで出て行つた。

爛漫と咲き溢れてゐる花の華麗。

竹を割つた中身があまりに洞すぎる寂しさ。

こんな二つの矛盾を一人の娘が備へてゐることが、私の氣になつて來たし、この娘の快活の中に心がかりであるらしいその店員との關係も、考へられた。

私は何だか來てしまつて見ると、期待したほどの慾も起らない河面の景色を、それでも好奇心で障子を開けてみた。硝子戸を越して、荷船が一ぱい入つて向うの岸は見えない。その歩あゆび板の上に、さき程の娘は、もう水揚げ帳を持つて、萬年筆の先で荷夫かふたちを指揮してゐる姿が眺められた。

私は毎日河沿ひの部屋へ通つた。叔母と一緒に晝飯を濟ませ、ざつと家の中を片付けて、女中に留守中の用事を云ひつけてから出かけた。化粧や着物はたいして手数がかゝらなかつた。見られる同性といふならば、あの娘ぐらゐなもので、その娘は他人に對するさういふ詮索には全然注意力を持たないらしかつた。それは私を氣易くさせた。

この宿の堆朱つみしゆの机の前に坐つて、片手を小長火鉢の紫檀したんの縁かざに翳しながら、晩秋から冬に入りかける河面を丸窓から眺めて、私は大かた半月同じ姿勢で爲すことなく暮した。

河は私の思つたほど、静かなものではなかつた。始終船が往き來した。殊に夕暮前は泊りの場所へ急ぐ船で河は行き詰つた。片手に水竿を控へ、彼方此方に佇んで當惑する船夫の姿は、河面に蓋をした廣い一面板に撒き散らした箱庭の人形のやうに見えた。船夫たちは口々に何やら判らない言葉で呶鳴どなつた。舷で米を炊かしいでゐる女も、首を擧げて呶鳴どなつた。水上警察の巡邏船が來て整理をつけた。

娘は滅多に來ないで、小女のや、まといふのが私の部屋の用を足した。私はその小女から、帆柱を横たへた和船型の大きな船を五大力ごだりきといふことだの、木履きうりのやうに膨れて黒いのは達磨だるまぶねだといふことだの、傳馬船てんばせんと荷足り船にたりせんの區別をも教へて貰つた。

しかし、そんな知識が私の現在の目的に何の關りがあらう。私が書いてゐる物語の娘に附與したい性格を囁いて呉れさうな一光閃くわうせんも一陰翳いんえいもこの河面からは射して來ない。却つてだん／＼川にも陸の上と同じやうな事務生活の延長したものが見出されて來る。私がかういふ部屋を望んだ動機がそも／＼夢だつたのだらうか。

すでにこの河面に嫌厭たるものを萌もしてゐるその上に、私はとかく後に心を牽ひかれた。何といふ不思議なこの家の娘であらう。この娘にも一光閃くわうせんも一陰翳いんえいもない。たゞ寂しいと云へばあまりに爛漫として美しく咲き亂れ、そして、ぴし／＼働いてゐる。それがどういふ目的のために何の情熱からといふこともなく快活そのものが働くことを藉かりて、時間と空間を剪はみ刻んで行くとし

か思へない。内にも外にも虚白なものの感じられるのを、却つて同じ女としての私が無關心でゐられる筈がなかつた。

娘はその後、二度程私の部屋に來た。一度は「ほんとに氣が付きませんで……」と云つて、三面鏡の化粧臺を店員たちに運ばせて、程よい光線の壁際に据ゑて行つた。一度は漢和の字引をお持ちでしたらと借りに來て、私がこゝまでは持つて來ないのを知り、「お邪魔いたしましたわ」と云つてあつさり去つた。

私がまだ意識の底に残してゐる、私と何等かの關係ありさうな海好きの店員のことも、娘は忘れたかのやうに、すこしの消息も傳へない。私の多少當が外れた氣持が、私がこの家へ出入りのときに眼に映る店先での娘の姿や、窓越しに見る^{ふないた}浮板の上の娘の姿にだん／＼凝つて行くのであつた。私の仕事は徒らに開かれて閉ざされるばかりである。

私はだいぶ慣れて來た小女のやまに訊いてみた。

「お嬢さんはどういふ方」

するとやまは難しい試験の問題のやうにしばらく考へて、

「さあ、どういふ方と申しまして……あれきりの方でございませう」

私はこのませた返事に微笑した。

「この近所では龜島河岸のモダン乙姫と申してをります」
私の微笑は深まつた。

「他所へお出になることがあつて」

「滅多に。でも、お買ひものの時や、お店のお交際つきあひには時たまお出かけになります」

「お店のお交際つきあひといふと……」

私は娘の活動範圍が、そこまで圈わを擴げてゐるのに驚いた。

「よくは存じませんが、組合のご相談だの、宴會だの。けふも船の新造卸しのお晝のご宴會に深川までお出かけになりましたが……」

その夕方歸り仕度をしてゐる私の部屋の前で、娘の聲がした。

「まだお在いでになりました」

盛装して一流の藝妓とも見える娘。娘に「ちよつと入つて頂戴」と云はれて、そのあとから若い藝妓が二人とお雛妓しやぐいが一人現れた。

部屋の主は女あるじの私一人なのに、外來の女たちはちよつと戸惑つたやうだが、娘が紹介すると堅苦しく挨拶して、私が差出した小長火鉢にも手を翳かざさず、娘から少し退つて神妙に坐つた。いづれもかなりの器量だが、娘の素晴らしい器量のために皺められて見えた。

娘は私には「この人たち宴會場から送つて來て呉れたのですけれど、筆をお執りになる方には何かのご經驗と思ひついて、ちよつとお部屋へ上つて貰ひましたの」と云つた。

少しの間、窮屈な空氣が漂つてゐたが、娘は何も感じないらしく、「みなさん、こちらに面白さうなことを少し話してあげて下さい」と云ふにつれ、私も「どうぞ」と寛くろいだ様子を出来るだけ示したので、女たちは、「ちや、まづ、一ぷくさせて頂いて……」と袂たもとから、キルク口の苧たはこを出して、煙を内輪に吹きながら話した。

今までゐた宴會の趣旨の船の新造卸しから連想するためか、水の上の人々が酒樓に上つたときの話が多かつた。

船に乗りつけてゐる人々はどんなに氣取つても歩きつきで判るのである。疊の上ではそれほどでもないが、廊下のやうな板敷きへかゝると船の傾きを踏み試すやうな蛙股かへるまたの癖が出て、踏み締め、踏み締め、身體の平定を衡はかつて行くからである。一座の中でひどく酔つた連れの一人が洗面所へ行つたが、その歸りに料亭の複雑な部屋のどこかへ紛れ込んで、探しても判らなかつた。すると他の連中は、その連れの一人が乗組んでゐる船の名を揃へて呼んだ。

「福神丸やーイ」

すると、「おーい」と返事があつて紛れた客があらぬ方からひよつこり現れた。

ある一軒の料亭で船乗りの宴會があつた。少し酔つて來るとみんな料理が不味いと云ひ出した。苦笑した料理方が、次から出す料理には腕にも焼物にも鹽を一摘つまみづゝ投げ入れて出した。すると客はだいぶ美味しくなつたと云つた。それほど船乗りの舌は鹹味からみに強くなつてゐる。

けふはいゝ鹽梅あんばいに船もさうこまないで、引潮の岸の河底が干潟がたになり、それに映つて日暮れ近い穩かな初冬の陽が靜かに褪さめかけてゐる。鷗が來て漁あきつてゐる。向う岸は倉庫と倉庫の間の空地に、紅殻色べにがらいろで塗つた柵の中に小さい稻荷いなりと鳥居が見え、子供が石蹴りをしてゐる。

さすがに話術を鍛へた近頃の下町の藝妓の話は、巧まずして面白かつたが、自分の差當りの作品への焦慮からこんな話を喜んで聞いてゐるほど、作家の心から遊離していゝものかどうか、私の興味は臆しながら、牽ひき入れられて行つた。